

天皇陛下 御即位二十年

御即位十年のお祝いの時には、私をはじめ7人の方々が、熊野神社の代表として、皇居前での式典に参加してまいりました。寒くて雨が降る中8万人の方々が不平不満も言わずに両陛下がお出ましになるまで3時間以上も立ってお待ちしていました。式典に感激し、参加の皆様にも感動して帰って来たことを今でも忘れません。

来年11月12日に御即位二十年の式典が計画されています。ご一緒に参加しませんか。感動、感激を皆様と共に感ずることができればありがたいと思います。



H20.5~7 両陛下は賓客や各国首脳とご面会に



H20.5.29 「国宝 薬師寺展」を鑑賞された両陛下



H20.7.28 リサイクル関連工場を視察された天皇陛下



H20.6.15 第59回全国植樹祭に隣席された両陛下

ことだま 言葉について

神道において、と言うよりも、日本人として言葉思想について少しお話しさせて頂ければと思います。

色々な会合などで、使わないほうが良いという言葉があります。忌み言葉というものです。「割る」や「終わる」をさけて、「鏡開き」や「お開き」と言ったり、「すり鉢」を「当り鉢」、「するめ」を「あたりめ」、「切る」を「入刀」などなど。知らず知らずのうちに、私たち日本人は、昔から、言葉の使い方を大切にしてきました。それは、言葉に命が宿ると考えてきたからです。神道では、祝詞がまさにそれにあたると思います。

嫌なことは聞けば、嫌な気分が生まれるので、嫌な気分になる。つまり、言葉が事柄（ことがら）を生んでいるのです。言葉が、聞いた人の心の中に住み着くということになる。うれしい事を聞けば、うれしい気分が生まれ、うれしくなる。これも事柄です。何も言わなければ、何も起こらないので「口は災いの元」という格言もあります。

言葉によって、喜怒哀楽が起こってしまう事を私たちは体験していると思えます。言ったことがそのまま形となって現れるという信仰が、言葉信仰です。つまり、言うことが事柄（ことがら）になる、ということです。

万葉の時代には、「言（こと）」と「事（こと）」とは混じりあっていて、同じ意味に用いられていました。「言

と事と心が一体だから、言葉が事柄を生む。」という考えは、言葉の中に霊が生きているからで、それを言葉というのです。

そこで言葉が人に与える影響が問題になってくるのです。テレビやラジオなどで釈明の発言などを聞いていますと、単に釈明文を読み上げている発言と、本当に申し訳なかったという気持ちで伝わる発言があります。発言の内容ではなく、発言の言葉に気持ちが入っているかどうかを私たちが分かるからです。言葉を感じる力を私たちが持っているのです。ですから、私たちは言葉の大切さに思いをめぐらさなければならぬと思います。

常日頃私も、言葉遣いには気をつけていますが、「しまった。なんであんな言葉を使ったのか。」と思うことがたびたびあります。そのときには、やさしくご指導いただければ幸いです。よろしくお願ひします。

この「言葉について」は、神社新報に掲載された、皇學館大學教授の松田典祀先生の「国語の特質としての言葉思想」を参考にさせて頂きました。

